



令和4年度 あかぎ無限大キャンプ 事業報告書

あかぎ 無限大 キャンプ

AKAGI
MUGENDAI
CAMP



令和5年1月

はじめに

「限界突破キャンプ」の3年間の成果を生かし、今年度は、対象者やプログラムを見直し、新たに「あかぎ無限大キャンプ」としてスタートしました。今回は、単年度事業としてではなく3年間で完結することを目指し、3年間をかけてよりよいプログラムに改善して、実施していきたいと考えます。

主な変更点ですが、

- 3年間を見通した「目指す子供像」を掲げました。事業担当者が変わっても3年間を通して、この「目指す子供像」に向けて取り組んでいきたいと考えました。(P1(2) 目指す子供像参照)
- 昨年度、試行として実施しました「学校法人慶應義塾大学医学部眼科・株式会社坪田ラボ・独立行政法人国立赤城青少年交流の家」の三者の共同研究に、今年度から「近視予防フォーラム」が入り、四者の共同研究が本格的に始動しました。また、推進委員として事業の企画の段階から、ご協力いただくことになりました。
- 対象者を異年齢集団(小学校5年生~中学校2年生)から同年齢集団(小学校5・6年生)に変更しました。これは、前述の共同研究を進めていくうえで、事業に参加していない対象群にまで広げて検査していく可能性を考えてのことです。(P16【展望】参照)
- プログラムも登山中心の活動から、屋外のグループ活動中心に①ゆとりのあるプログラム②選択できるプログラムを入れる計画を立てました。残念ながら選択登山はできませんでしたが、自分の意志表示ができることを目指し、今回は実施できることを願っています。(P5(2) プログラムデザイン参照)

新型コロナウイルス感染症の対応について、「国立赤城青少年交流の家における新型コロナウイルス感染症拡大予防ガイドライン」に基づいて取り組んできましたが、新型コロナウイルス感染症はまだ終息しておらず、今年度は事業の日程短縮の決断をすることとなりました。(P4(1) 日程参照)

このことにより、多くのことを私たち「赤城のスタッフ」も学びました。青少年教育施設で長期自然体験事業を安全に実施するために、今後、事前キャンプ・本キャンプ・事後キャンプの参加の際に検温だけでなく、「抗原検査」の実施を全員にお願いする等の対策が必要だと強く感じました。(P18(2) 課題参照)

8月11日に保護者の方に集まっていただき、日程短縮の決断から、当日までの状況説明を行いました。説明終了後、保護者の方々から「こういう事態の説明も受けて、参加していますから。」と声をかけられ、保護者の方々への事前説明と事業担当者からの細やかな連絡が、信頼関係を築くために必要なことだと改めて思いました。

「あかぎ無限大キャンプ」としては、まだ一歩踏み出したばかりです。

本報告書が、長期自然体験事業を実施する青少年教育施設の皆さんに少しでも活用していただけることと、青少年の体験活動の推進を図る一助になることを願っています。

国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子

目次

はじめに

1. 令和4年度あかぎ無限大キャンプの推進

(1) 趣旨	01
(2) 目指す子供像	01
(3) 手立て	02
(4) 実施概要	02
(5) 推進委員会の概要	03

2. あかぎ無限大キャンプ事業の内容

(1) 日程	04
(2) プログラムデザイン	05
(3) 安全対策	06
(4) 各キャンプの内容	
①ボランティア研修キャンプ	07
②事前キャンプ	08
③本キャンプ	09
④事後キャンプ	11

3. 調査結果

(1) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の変容	12
(2) あかぎ無限大キャンプにおける社会的能力の変容	14
(3) 慶應義塾大学医学部・国立赤城青少年交流の家・株式会社坪田ラボ・近視予防フォーラムとの共同研究	15

4. 成果と課題

(1) 成果	17
(2) 課題	18
(3) 推進委員より	19
(4) スタッフより	20

おわりに	22
------	----

1 令和4年度あかぎ無限大キャンプの推進

(1)趣旨

- ①7泊8日の長期自然体験活動において、協働的な体験プログラム(野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等)を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- ②7泊8日の長期自然体験活動の集中的な屋外活動(外遊び)を通して、近視進行の抑制(健康の保持増進)を図る。

(2)目指す子供像

目指す未来社会像 Society5.0
 持続可能性と強靱性を備え、国民の安全と安心を確保するとともに、
一人ひとりが多様な幸せ (well-being) を実現できる社会

○実現に向けた3本の政策の柱

- ・国民の安全と安心を確保する持続可能で強靱な社会への変革
- ・知のフロンティアを開拓し価値の創造の源泉となる研究力の強化
- ・一人ひとりの多様な幸せと課題への挑戦を実現する教育・人材の育成

「多様性」「公正や個人の尊厳」「多様な幸せ (well-being)」の価値が Society5.0 の中核であること
「第6期科学技術・イノベーション基本計画」
 (2021 内閣府総合科学技術・イノベーション会議)

自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 前文」

目指す子供像

- ・自分の意見を発言でき、他者の意見を傾聴できる子供
- ・自分のよいところ(長所)と他者のよいところ(長所)に気付ける子供
- ・合意形成をしながら、対話・行動ができる子供

○協働的な自然体験活動プログラム
(野外炊事・赤城山登山・レクリエーション等)

①ゆとりのあるプログラム

- ・他者の特徴を知るための時間
- ・活動プログラムを習得する時間
- ・活動前の話し合いの時間
- ・自分の考えをまとめる時間
- ・一日のふりかえりの時間

②選択できるプログラム

- ・グループの話し合いで決める活動
(レクリエーション・野外炊事・テント設営)
- ・個人の能力で決める活動
(赤城山登山)

長期自然体験活動を通して

○与件

- ・国立赤城青少年交流の家・赤城山エリアでの7泊8日
- ・事前研修をつんだ法人ボランティア6名程度の参加
- ・「限界突破キャンプ」(平成30年度～令和3年度)において、「自分のいいところやがんばりを褒められたこと」を多く経験すると、「根気」に高い教育効果があることが示唆された。

○現代的な課題

- ・インターネット等を通じた擬似的・間接的な体験が増加。
- ・人やもの、自然に直接触れるという体験活動の機会の減少。
- ・コロナ禍の影響による体験活動の機会の減少。

○一般的な小学校高学年の発達の特徴

- ・自分のことを客観的にとらえられるようになる。
- ・自己肯定感を持ち始める。
- ・個人差が大きく自己に対する肯定的な意識を持たず、劣等感を持ちやすくなる。
- ・集団の規則を理解して、集団活動に主体的に関与する。
- ・遊びなどでは自分たちで決まりを作り、ルールを守るようになる。
- ・閉鎖的な子どもの仲間集団が発生し、付和雷同的な行動が見られる。

(3)手立て

- ①事業を「ファースト」「セカンド」「サード」「フォース」「ファイナル」の5つのステージに分け、ステージごとにねらいを設定する。
- ②「他者の特徴を知るための時間」「活動プログラムを習得する時間」「活動前の話し合いの時間」「自分の考えをまとめる時間」「1日のふりかえりの時間」を十分に確保するために、ゆとりのあるプログラムを編成する。
- ③「サード【グループ】」ステージで、グループ間の協議が活発になるように、グループの話し合いで決める活動(グループキャンプタイム)を設定する。
- ④「フォース【成長】」で、個人の成長を実感できるように「個人の能力で決める活動(赤城山選択登山)」を設定する。
- ⑤事前にボランティア研修キャンプを実施し、青木委員による「ふりかえりの仕方」についての講義・演習を行い、毎日の「ふりかえり」を充実させる。

(4)実施概要

①期日

- 【ボランティア研修】 令和4年7月2日(土)～7月3日(日)(1泊2日)
- 【事前キャンプ】 令和4年7月9日(土)～7月10日(日)(1泊2日)
- 【本キャンプ】 令和4年8月6日(土)～8月13日(土)(7泊8日)
※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、8月6日(土)～8月11日(木)に日程を短縮した。
- 【事後キャンプ】 令和4年9月17日(土)～9月18日(日)(1泊2日)

②参加者

- 【対象】 小学5年生～小学校6年生 24名(男子12名、女子12名)
- 【人数】 小学5年生男子：5名 小学6年生男子：7名
 小学5年生女子：6名 小学6年生女子：6名
 群馬県：15名 埼玉県：2名 栃木県：1名 茨城県：2名 千葉県：1名
 東京都：2名 神奈川県：1名
- 【班編成】 1班6名で4班に編成(異年齢集団)

③スタッフ

- ・国立赤城青少年交流の家職員：4名
- ・全体ボランティア：2名
- ・班付きボランティアスタッフ：8名

(5) 推進委員会の概要

①委員の構成（推進委員4名）（五十音順）

國學院大學人間開発学部 准教授	青木康太郎
群馬県西部教育事務所生涯学習係 社会教育主事	青山 裕也
慶應義塾大学医学部眼科学教室 特任助教	小川 護
国立赤城青少年交流の家 所長	松村 純子

②委員会の日程と議事内容

●第1回推進委員会 5月16日（月）

（推進委員の役割）

- ・青木委員には事業実施による子供の変容に関する調査。青山委員には群馬県内への広報及び活動プログラムへの指導・助言。小川委員には事業実施による近視抑制に関する調査。松村委員には、事業総括、報告書作成への指導・助言。

（実施案検討）

- ・長期間のキャンプになるため、一定の期間ごとにコンセプトやステージを決めるとよい。また、本キャンプ中盤で、グループで自由に過ごす時間があるとよい。その場合、ボランティアへの指導が大切になる。
- ・野外炊事に関しては、プログラムが進むにつれて、料理の選択肢を増やすとよい。登山については、途中で他のグループと会えるようなコースにする。

（調査検討）

- ・「ふりかえりシート」は、全日分見えるようにして変化が分かるようにした方がよい。
- ・「ふりかえりシート」は、グループでの話し合いの後に書かせた方がよい。数値よりも言葉の指標があった方がよい。

●第2回推進委員会 9月22日（木）

（事業報告）

- ・映像でのキャンプのふりかえりで、決意表明から、子供たちにとってこのキャンプで心に残ったものがあつたことが感じられた。
- ・保護者アンケートから、保護者自身も子供のことをよく観察していることが分かる。昨年度までの長期キャンプと内容を変えて何が良くなったかに注目したい。

（報告書の構成案）

- ・本来の計画していた7泊8日のプログラムと、日程短縮後のプログラムをどちらも掲載する。プログラム変更の判断やその経緯、変更したことによる効果については、今後の事業にとって大事な要素になる。

●第3回推進委員会 11月17日（木）

（報告書の確認）

- ・「(1)趣旨」と「(2)手立て」の間にあかぎ無限大キャンプの「目指す子供像」についての記載を入れる。

（来年度の日程案）

- ・キャンプ実施前に丸1日使って事業のイメージをつかむ時間を取れるとよい。
- ・グループ対抗のプログラムを実施し、自分たちのグループの良さを感じる機会があるとよい。

2 あかぎ無限大キャンプ事業の内容

(1) 日程

（■=グループプログラム、■=個人プログラム、■=外部講師プログラム）

●7月2日～7月3日 ボランティア研修キャンプ（国立赤城青少年交流の家）

ステージ	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 7/2日						受付	事業概要説明	赤城山登山 (覚満淵～鳥居峠～ 長七郎山～小沼)	移動		野外炊事 たき火含む (カレー作り)		入浴	ついで 退所点検 の仕方			就寝	交流の家 (本館)	
2日目 7/3日		起床	荷物整理	朝食 (食堂)	清掃 点検	所長 講話	青木委員講話	昼食 (食堂)	研修支援体験 オリエンテーリング	アンケート								就寝	交流の家 (本館)

●7月9日～7月10日 事前キャンプ（国立赤城青少年交流の家）

ステージ	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 7/9日						受付	事前説明会 ※保護者も参加	自己紹介 アイスブレイク	荷物 移動	昼食 (食堂)	レクリエーション (キンボールクック)			野外炊事 (カレーライス)	ナイトプログラム (ナイトワーク)		入浴	ふりかえり 健康観察	交流の家 (本館)
2日目 7/10日		起床	荷物整理	朝食	清掃	退所点検	赤城山登山 (覚満淵～鳥居峠～ 長七郎山～小沼)	昼食 (小沼)	ふりかえり アンケート記入									就寝	交流の家 (本館)

●8月6日～8月13日 本キャンプ（国立赤城青少年交流の家）

ステージ	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 8/6日						受付	開会式	アイスブレイク	荷物 移動	昼食 (食堂)	レクリエーション (「どんなチーム 旗を作ろうか?」)			野外炊事 (カレーライス)	入浴	チームMT① 「どんなチーム 旗を作ろうか?」	ふりかえり 健康観察	就寝	交流の家 (本館)
2日目 8/7日		起床	床 健康観察 荷物整理	朝食 (食堂)	クラフト体験 (かな箸、スプーン作り)			昼食 (食堂)	テント設営	レクリエーション (オリエンテーリング、 ディスクゴルフ、 グランドゴルフ 等)	夕食 (食堂)		入浴	ナイト プログラム [レク]	チームMT② [曜日何 しようか?]	ふりかえり 健康観察 (センター)	就寝	交流の家 (センター)	
3日目 8/8日		起床	床 健康観察 荷物整理	朝食 (食堂)	洗濯 部屋 干し	選択レクリエーション① (各グループごとに遊ぶ)	昼食 (食堂)	選択レクリエーション② (各グループ ごとに遊ぶ)		野外炊事 (焼きそば)			入浴	登山MT 「どの山を 登ろうか?」	ふりかえり 健康観察 (センター)	就寝	交流の家 (センター)		
4日目 8/9日		起床	床 健康観察 荷物整理	野外炊事 (朝食づくり)			グループキャンプタイム チームMT③ 「グループキャンプタイムで何をしようか?」					入浴	ふりかえり 健康観察 (センター)	グループ キャンプ タイム	就寝	交流の家 (センター)			
5日目 8/10日		起床	床 健康観察 荷物整理	グループキャンプタイム			昼食 (食堂)	洗濯 部屋 干し	チームMT④ 「お別れパーティーで何をしようか?」 (レク・選択野外炊事)	夕食 (食堂)		入浴	ナイト プログラム [自然観察]	登山安全 ふりかえり 健康観察	就寝	交流の家 (センター)			
6日目 8/11日		起床	床 健康観察 荷物整理	朝食 (食堂)	赤城山選択登山 ①新坂平駐車場～地藏岳～八丁峠～銚子の峠～小沼駐車場 ②大沼駐車場～黒檜山～駒ヶ岳～鳥居峠～長七郎山～小沼駐車場			夕食 (食堂)		入浴	キャンプの まとめ 発表の仕方	ふりかえり 健康観察	就寝	交流の家 (本館)					
7日目 8/12日		起床	床 健康観察 荷物整理	朝食 (食堂)	キャンプのまとめ・発表準備		昼食 (食堂)	パーティ準備		お別れパーティ (選択野外炊事・レク)		入浴	ふりかえり 健康観察	就寝	交流の家 (本館)				
8日目 8/13日		起床	床 健康観察 荷物整理	朝食 (食堂)	退所点検	ふりかえり 退所点検 アンケート	閉会式 リハ	閉会式	解散									就寝	交流の家 (本館)

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、8月6日(土)～8月11日(木)に日程を短縮した。詳細は、P9～10(4)各キャンプの内容③本キャンプ参照。

●9月17日～9月18日 事後キャンプ（国立赤城青少年交流の家）

ステージ	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 9/17日						受付	開会式	本キャンプを ふりかえろう (映像・レクリエーション)	荷物 移動	昼食 (食堂)	チームMT⑤ 「これから 何をしようか?」	選択レクリエーション② (各グループごとに遊ぶ)		長期自然体験キャンプ同窓会 ①野外炊事(カレーライス) ②キャンプファイヤー	入浴	登山安全確認 ふりかえり 健康観察	就寝	交流の家 (本館)	
2日目 9/18日		起床	床 健康観察 荷物整理	朝食 (食堂)	退所点検	チームMT⑥ 「来年長期自然体験キャンプに参加 するののために何が出来るかな?」	昼食 (食堂)	成果物 発表会	ふりかえり アンケート記入	解散								就寝	交流の家 (本館)

※本キャンプを日程短縮したため、プログラム内容の変更を行った。1日目に「赤城山登山」、2日目に「眼の検査」を実施した。詳細は、P11(4)各キャンプの内容④事後キャンプ参照。

(2) プログラムデザイン

【ステージについて】

全体のねらい達成に向け、キャンプを5つのステージに分け、ステージごとのねらい、活動のポイント、スタッフのかかわり方について明確にし、キャンプを実施した。

日程	ステージ	ステージのねらい	活動のポイント	スタッフのかかわり方
事前キャンプ1日目 7/9 (土)	【ファースト】 出会い	本キャンプに向けて、新しい仲間とともに協力して取り組んでいこうとする意欲をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 本キャンプに向けて、必要な心構えや道具の準備を自分なりに考える。 初めて出会う仲間と様々な活動に進んで取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 子供たちの緊張をほぐすために、笑顔で接し、明るく元気に前向きな態度で接する。 基本的な生活習慣(早寝早起き朝ごはん)や挨拶、正しい言葉遣い、整理整頓などについて指導し、意識付けを行う。 個人の特徴(人とかかわり方などの性格)をつかみ、記録を取る。
事前キャンプ2日目 7/10 (日)				
本キャンプ1日目 8/6 (土)	【セカンド】 獲得	グループメンバーの個性を知るとともに、野外炊事等のキャンプに必要な基礎知識や技能を身に付ける。	<ul style="list-style-type: none"> 様々な活動をとおり、自分の得意なこと(長所)や仲間の得意なことに気付く。 チームの仲間を助けたり、助けられたりすることで仲間のよさに気付く。 キャンプ生活に必要な様々な知識、技術を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 個人とグループの特徴をつかみ、記録を取る。 野外炊事などのキャンプ生活に必要な基礎知識や技術を伝え、手本となる。 個々の緊張を和らげ、チーム内でお互いのかかわりが生まれるようにする。
本キャンプ2日目 8/7 (日)				
本キャンプ3日目 8/8 (月)				
本キャンプ4日目 8/9 (火)	【サード】 グループ	身に付けた基礎知識や技能を生かし、「グループキャンプタイム」で合意形成を図りながら仲間と協働することができる。	<ul style="list-style-type: none"> チームの中での自分の役割を理解し、その役割を果たす。 助けが必要な場面で適切に仲間を助け、互いに協力して活動に取り組む。 チームの仲間の励ましや助けが、「グループキャンプタイム」を充実させていることを実感する。また、やり抜いた自分の頑張りに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 子供の体力的な様子に目を配り、体調の変化の把握に努める。 子供たちの挑戦を積極的に励まし、認め、一人一人の意欲を高める。 子供たちの人間関係について実態把握し、スタッフ間の連絡を密にして支援する。
本キャンプ5日目 8/10 (水)				
本キャンプ6日目 8/11 (木)	【フォース】 成長	キャンプの中で、できるようになったこと・意識したことを整理し、言葉でまとめることで自身の成長を実感する。	<ul style="list-style-type: none"> 心身の状態を考え、自分に適した登山コースを選択する。 日々のふりかえりを活用し、自身の成長を実感する。 	<ul style="list-style-type: none"> 登山ルートでは、安全の確保は徹底するが、直接的な手助けは行わず、仲間同士での助け合いを見守る。 キャンプスタート時の頃の自分を想起させ、やり抜いたことに対する自信を持たせる。
本キャンプ7日目 8/12 (金)				
本キャンプ8日目 8/13 (土)				
事後キャンプ1日目 9/17 (土)	【ファイナル】 旅立ち	全日程をやり遂げたという達成感を味わい、これまでの自分と今の自分の変化や成長を見つめ、今後の自分の生き方について考える。	<ul style="list-style-type: none"> チームの仲間と過ごした日々をふりかえり、自分の意見をもち発言すること、他者の意見を傾聴することの大切さを確かめる。 最後までやり抜いた自分を見つめ、成長を実感し、これからの生活に生かしていこうという気持ちをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> キャンプを通して学んだことを、今後の人生にどのように生かしていきたいか、しっかりと考えさせる機会を充実させる。 これからも、何事にも自信を持って取り組むよう言葉をかける。
事後キャンプ2日目 9/18 (日)				

(3) 安全対策

① 熱中症対策

- グループごとの屋外での活動時は、班付きボランティアをタイムキーパーとして適宜、木陰等で休憩をとるようにした。
- 塩分補給のタブレットを小袋に小分けして参加者に配布した。こまめに補給するよう声かけを徹底した。
- 首元を冷やすスカーフを参加費で購入し配布した。
- WBGT 測定をこまめに行い、「警戒」「厳重警戒」を示している時は、水分補給・塩分補給・木陰で休憩をする声かけを徹底した。
- 緊急の避難所として冷房で冷やした部屋を1室確保した。

② 新型コロナウイルス感染症対策

- 「国立赤城青少年交流の家における新型コロナウイルス感染症拡大予防ガイドライン (Ver.10)」(事前キャンプ実施時点のガイドライン) を基に実施した。
(国立赤城青少年交流の家 HP 参照)
- 事前に参加者・スタッフに参加2週間から体温や健康管理を行わせ、健康管理票を提出させた。
- 日程内の検温について、朝夕食前の検温を基本として毎日記入を行った。
※事後キャンプでは、個人用携帯アルコール消毒スプレーを配布。また、非接触でない体温計を持参させた。
- 宿泊室は、4人部屋を2人1部屋で実施した。テント泊では1人1張を準備した。
※事後キャンプでは、1人1部屋で実施。

③ 登山時の安全対策

- 複数のコースを設定し、実地踏査を行った。小学校高学年の体力に即した登山プログラムを構成した。
- ボランティア研修キャンプで、職員とボランティアで登山時の注意点を実地踏査を行い確認した。
- 参加者とスタッフ全員で、事前キャンプ、本キャンプの登山前にコースや注意点を確認する「登山MT(ミーティング)」を設定した。
- 実施体制や緊急の対応(フローチャートの設定、エスケープコースの設定)し、スタッフの動きが共有されるようにした。
- 事後キャンプの登山では、事前に登山経路及び危険箇所をボランティアに送付し、安全管理について共有を図った。

(4)各キャンプの内容

① ボランティア研修キャンプ

1. 企画運営のポイント

- (1) あかぎ無限大キャンプに向けて、野外炊事・登山についての基本的な知識や技能を身に付け、ボランティアとしての心構えをもてるよう企画した。
- (2) ふりかえりの行い方について、具体的なイメージをもてるように、推進委員である青木氏を講師として招き、演習形式で行った。
- (3) ボランティアが見通しと余裕をもって事前キャンプに臨めるように、事前キャンプの内容に沿った研修内容と事前キャンプ細案読み合わせを行った。
- (4) 職員・ボランティアが一つのチームとしてまとまるように、プログラムごとにチーム編成を変えて、多くの人とコミュニケーションを図りやすくした。

2. 日程・主な活動内容

日程	午前	午後
7月2日(土)	集合 自己紹介・アイスブレイク 事業概要説明 登山(覚満淵～鳥居峠～長七郎～小沼) 昼食(小沼湖畔)	野外炊事 入浴 つどい・退所点検の仕方 就寝
7月3日(日)	朝のつどい 朝食 所長講話 青木委員講義・演習	テント設営練習 事前キャンプ細案読み合わせ アンケート 解散

3. 活動の様子



赤城山登山



野外炊事



青木委員講義・演習

4. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足: 10人(100%) やや満足: 0人(0%) やや不満: 0人(0%) 不満: 0人(0%)

(2) 成果

- ・キャンプに向けて心構えができ、具体的なイメージをもつことができたという参加者の感想や声が多かったことから、実践的な研修(登山・野外炊事・テント設営)が有効であったと考える。
- ・ふりかえりの行い方について、参加者は具体的なイメージをもち事前キャンプに臨むことができるという感想が多かった。
- ・「よい刺激になった」「一体感が生まれた」等の参加者の感想や声が多かったことから、ボランティア間の交流を図ることができたと考える。

(3) 課題

- ・プログラムについては、事前、本、事後キャンプの全12日分を1泊2日で行うのは無理なので、優先事項を決めて取り組ませていく必要がある。
- ・野外炊事研修で一律カレー作りを行わせるのではなく、カレー、バーベキュー、朝食作りを3班に分けて行わせるなど効果的に行う必要がある。
- ・登山時の連絡体制を強化する必要がある。(通信障害含む)

② 事前キャンプ 【ファースト】

1. 企画運営のポイント

- (1) 本キャンプに向けて、心身の準備を自分なりに考えられるようにゆとりをもった日程・プログラムを計画した。また、登山・野外炊事についても基本的な知識・技能の習得が確実にできるように、丁寧な説明と全員が全ての行程を体験できるようにした。
- (2) ボランティア主体のアイスブレイクを取り入れることで、参加者との距離を縮めるとともに、実態把握を円滑にできるように配慮した。
- (3) 特定の参加者同士で固まらないように、プログラムごとにチーム編成を変更した。また、全てのボランティアに関わることができるようにも配慮した。

2. 日程・主な活動内容

日程	午前	午後
7月9日(土)	受付 開会式 自己紹介・アイスブレイク 昼食	レクリエーション・眼の検査 野外炊事 入浴 ふりかえり 就寝
7月10日(日)	朝のつどい 朝食 登山 (覚満淵～鳥居峠～長七郎～小沼) 昼食(小沼湖畔)	ふりかえり アンケート 解散

3. 活動の様子



アイスブレイク



野外炊事



赤城山登山

4. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足: 21人(88%) やや満足: 3人(12%) やや不満: 0人(0%) 不満: 0人(0%)

(2) 成果

- ・「思った以上に友達ができよかった。」「スタッフが優しく接してくれた。」という参加者の声が多いことから、仲間づくりに成功し、本キャンプへの期待が高まったと考える。
- ・野外炊事において、「分量を間違えた。次に生かしたい。」など改善点が多数上がっていたことから、野外炊事の課題を見つけ、本キャンプに生かそうとする態度につながったと考える。
- ・赤城山登山では、体力的に厳しかった参加者が多く見られたが、本キャンプに向けて「体力づくりをがんばりたい。」という前向きな感想が多く見られた。

(3) 課題

- ・保護者面談について、本人が申し込みたいと言ったかどうか・学校での友人関係・参加者の体力・女子には生理の事等の共通フォーマットを作成する。
- ・コロナ禍で子供たちの体力が落ちていることを痛感した。今回のプログラムを受けて本番のプログラムを再考する。
- ・眼科検診時の活動(レクリエーション等)はグループごとで行えるものなどに再考する。

③ 本キャンプ 【セカンド】【サード】【フォース】

1. 企画運営のポイント

- (1) 本キャンプを「セカンド【獲得】」「サード【グループ】」「フォース【成長】」の3つのステージに分けて、ステージごとのねらい・活動のポイントを明確にして実施した。
- (2) 「他者の特徴を知るための時間」「活動プログラムを習得する時間」「活動前の話し合いの時間」「自分の考えをまとめる時間」「1日のふりかえりの時間」を十分に確保するために、ゆとりのあるプログラムを編成した。
- (3) 「サード【グループ】」で、グループ間の協議が活発になるように、グループの話し合いで決める活動（グループキャンプタイム）を設定した。
- (4) 「フォース【成長】」で、個人の成長を実感できるように「個人の能力で決める活動（赤城山選択登山）」を設定した。
※日程を短縮したため未実施。

2. 日程・主な活動

日程	活動
8月6日(土)	・開会式 ・アイスブレイク ・チームMT①「どんなチーム旗を作ろうか？」 ・野外炊事「カレーライスづくり」 ・眼の検査 ・ふりかえり
8月7日(日)	・クラフト体験「かんな箸・マイスプーンづくり」 ・テント設営 ・レクリエーション「オリエンテーリング 等」 ・ナイトプログラム「自然観察」 ・チームMT②「明日は何しようか？」 ・ふりかえり
8月8日(月)	・洗濯 ・選択レクリエーション① ・野外炊事「バーベキュー」 ・登山MT「どの山に登ろうか？」 ・ふりかえり
8月9日(火)	・野外炊事「朝食づくり」 ・チームMT③「グループキャンプタイムで何をしようか？」 ・グループキャンプタイム ・ふりかえり
8月10日(水)	・グループキャンプタイム ※テント片付け ・お別れパーティー ・ふりかえり
8月11日(木)	・ふりかえり ・閉会式

※あかぎ無限大キャンプの様子が、マスコミ各社に取り上げられた。

・令和4年8月7日(日) 群馬テレビ「SUNDAY ニュースジャスト」

・令和4年8月9日(火) 上毛新聞 16面掲載

3. 活動の様子



野外炊事（焼きそば）



野外炊事（朝食）



レクリエーション



テント設営①



テント設営②



群馬テレビ取材



朝のつどい



チーム旗づくり



ふりかえり

4. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：22人(100%) やや満足：0人(0%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

(2) 成果

- ・グループキャンプタイムの料理を既習の「カレーライス」「焼きそば」「朝食作り（パン）」の材料にしたことで見通しをもって3食分の献立を立てることができていた。また、参加者の自発的な調理につながった。
- ・参加者アンケートで、「自分たちで考えて決める活動が楽しかった。」「グループのレクリエーションが楽しかった。」等の感想が見られたことから、グループで考え話し合う活動が、参加者の挑戦意欲の向上やグループへの所属感につながったと考える。
- ・本キャンプの1カ月後の保護者アンケートで、「家の手伝いを自分からするようになった。」「(自分から)〇〇してみよう。」という感想から、本キャンプのプログラムが参加者の自発的な行動につながるきっかけの一助になったと考える。
- ・本キャンプ後に、「あかぎ無限大キャンプ」で学んだことについて上毛新聞読者投稿欄に自発的に投稿した参加者がいた。
(令和4年8月27日 上毛新聞 13面掲載)

【上毛新聞掲載内容】

ぼくは、夏休みに国立赤城青少年交流の家で開かれた「あかぎ無限大キャンプ」に参加しました。キャンプが好きだから応募しました。

初めは緊張したけれど、最初のレクリエーションでみんなの名前を覚えてだんだん仲良くなりました。自分でテントを張り、山で寝るのは気持ち良かったです。

野外炊事では野菜を切ったり、皮をむいたりしました。火おこしでは、よく燃える木の皮を拾ってきたりして、ぼくは火おこし名人と言われました。自然観察ではシカや流れ星が見られました。

7泊8日の予定だったのが短くなったけれど、5泊もできて、最後の夜はみんなで集まってマシュマロを食べたりアイスを食べたりしました。

この夏、ぼくには無限大キャンプの仲間ができました。またどこかで会える日を楽しみにしています。

(3) 課題

- ・レクリエーションや野外炊事への取りませ方を工夫し、グループの話し合いが、参加者にとって、より「必要感」があるものにする。
- ・キャンプ参加前を含む、参加者の健康状態の維持と把握の仕方を工夫すること。

④ 事後キャンプ 【ファイナル】

1. 企画運営のポイント

- (1) 参加者に達成感を味わわせ、自身の成長を実感させるために、日程短縮のため本キャンプで実施できなかった赤城山登山をプログラムに取り入れた。
- (2) 参加者が、本キャンプで学んだことや感じたことを家庭・学校生活で生かしていくために、閉会式で一人一人に決意表明をする時間を設けた。
- (3) 本キャンプを欠席した参加者や本キャンプ途中で帰宅した参加者がスムーズにキャンプに参加できるように、職員とボランティア間の事前の打ち合わせと情報共有の徹底を図った。

2. 日程・主な活動内容

日程	午前	午後
9月17日(土)	受付 開会式 登山(姫百合駐車場～荒山高原～鍋割山) 昼食(荒山高原)	たき火 入浴 ふりかえり 就寝
9月18日(日)	起床・洗面・掃除・荷物整理 朝食 レクリエーション	アンケート記入(2種類) 色紙づくり 眼の検査 閉会式(決意表明)

3. 活動の様子



登山



たき火



決意表明

4. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足: 23人(100%) やや満足: 0人(0%) やや不満: 0人(0%) 不満: 0人(0%)

(2) 成果

- 参加者の様子やアンケート記述で「登頂できてよかった。」「仲間と協力して登りきることができた。」とあることから、本キャンプで実施できなかった登山で達成感やグループの連帯感を感じることができたと考えられる。
- 閉会式で決意表明を取り入れたが、どの参加者もすぐに自身の感じたことを自身の言葉で発表することができた。そのことから、参加者は、本キャンプで学んだことを自分なりにふりかえり、これからの生活に生かしていこうとする意欲につながっていると考えられる。

(3) 課題

- 参加者が自身の成長や変容がわかるプログラムや掲示の開発。
- キャンプ参加前を含む、参加者の健康状態の維持と把握の仕方を工夫すること。

3 調査結果

(1) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の変容

1. ふりかえりシートについて

【ファースト】 出会い
ねらい: 本キャンプに向けて、新しい仲間とともに協力して活動に取り組もう。

<p>○7月9日の主な活動 ・アイスブレイク・レクリエーション ・野外炊事(カレーライス)</p> <p>○今日の活動をふりかえって ①自分の意見をしっかりと書いた (5・4・3・2・1) ②友達の意見に耳を傾けることができた (5・4・3・2・1) ③自分と友達の考えの違いに気づいた (5・4・3・2・1) ④みんなが納得する決定ができた (5・4・3・2・1) ⑤グループの決定に満足している (5・4・3・2・1) ⑥決まったことに対してやる気ができた (5・4・3・2・1)</p> <p>○明日の活動で生きたいこと 家庭生活や学校生活で生かしたいと思ったこと</p>	<p>○7月10日の主な活動 ・赤城山登山 (寛瀬湖～鳥居峠～長七郎山～小沼)</p> <p>○今日の活動をふりかえって ①自分の意見をしっかりと書いた (5・4・3・2・1) ②友達の意見に耳を傾けることができた (5・4・3・2・1) ③自分と友達の考えの違いに気づいた (5・4・3・2・1) ④みんなが納得する決定ができた (5・4・3・2・1) ⑤グループの決定に満足している (5・4・3・2・1) ⑥決まったことに対してやる気ができた (5・4・3・2・1)</p> <p>○明日の活動で生きたいこと 家庭生活や学校生活で生かしたいと思ったこと</p>
---	---

ふりかえりの項目について

- ①自分の意見をしっかりと書いた
- ②友達の意見に耳を傾けることができた
- ③自分と友達の考えの違いに気づいた
- ④みんなが納得する決定ができた
- ⑤グループの決定に満足している
- ⑥決まったことに対してやる気ができた

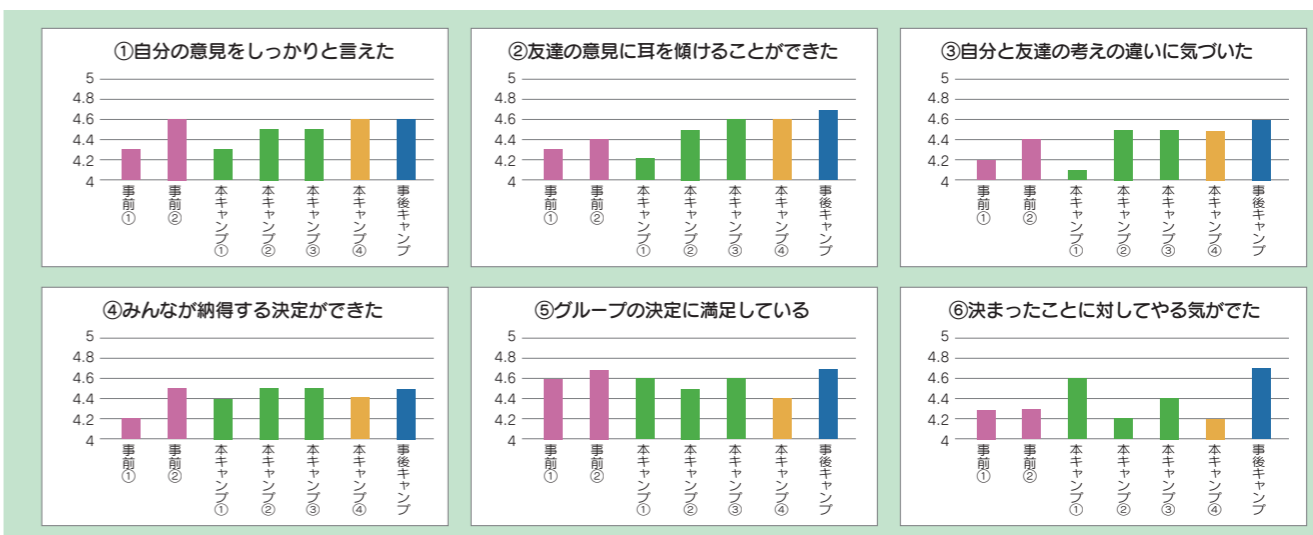
※ステージごとの協力的な自然体験プログラムの活動内容については、P.4参照

本事業では、キャンプをファースト(出会い)セカンド(獲得)サード(グループ)フォース(成長)ファイナル(旅立ち)の5つのステージに分けて実施し、毎日「ふりかえり」の時間を設定した。ステージごとに上記のふりかえりシートを活用し、グループでのふりかえりを行った後、個人でのふりかえりを行った。

※1～5段階の自己評価で、最大値は5

※フォースステージは新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、未実施

2. 参加者全体の変容



考察

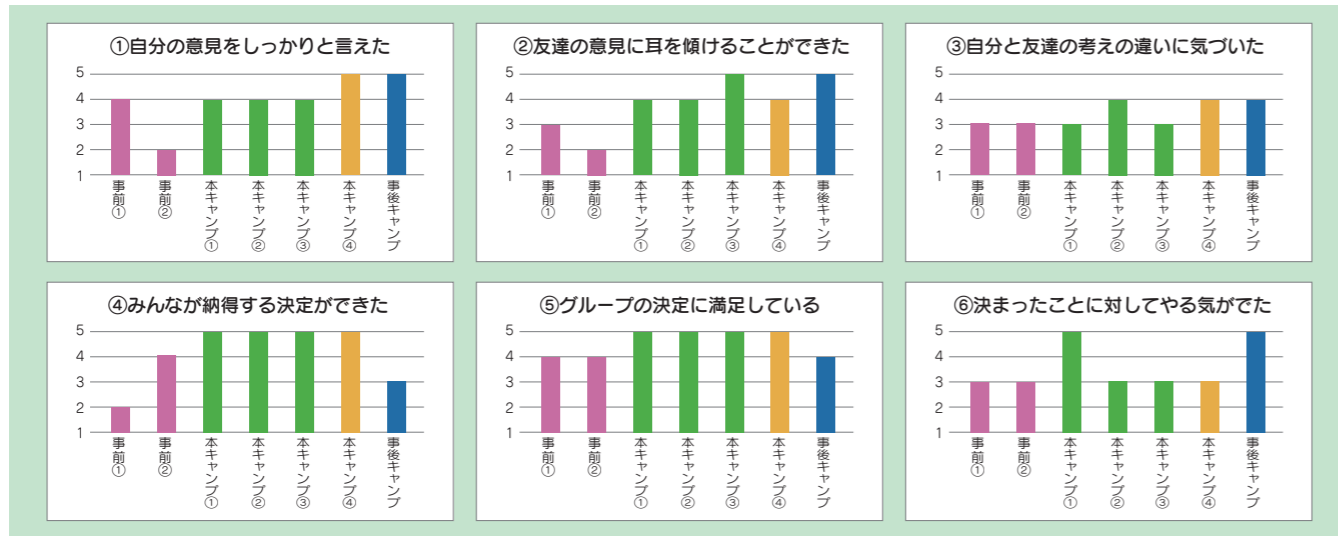
- ふりかえりの結果から、項目②・③において数値の向上が見られ、チームミーティングなどグループの話し合いの時間を確保したことが効果的だったことがわかる。
- 多様性を認め合える意識の醸成を図ること重視した本事業では、項目③の数値からわかるように、自分と友達の考えの違いに気づき、それぞれの考えを認め合えた参加者が多かった。
- 複数の項目で3日目の数値が低くなっていることがわかる。本キャンプの始まりの日であり、十分なコミュニケーションをとることができなかったことが要因だと考えられる。

3. 参加児童の変容

対象児A (小学生・女子)

A児は、事前キャンプ初日に「母親が勝手に申し込んだ」とキャンプ参加に否定的な発言をしている姿が見られた。また、ファーストステージのふりかえりでは自己肯定感が低く、参加者に対して強い言葉で当たっていた。ステージが進むにつれ、「自分の意見を伝える」「友達の意見に耳を傾ける」といった項目で肯定的な回答が見られるようになった。グループで決めた活動にも納得して参加し、楽しむ様子が見られた。

ア 自己評価



イ 自由記述

- 1日目：火おこしをうまくしたり、カレーをうまくつくったりしたい。
- 2日目：山登りで疲れたので、本キャンプに向けてトレーニングしたい。
- 3日目：自分の意見を伝え、決まったことを成功させたい。
- 4日目：協力して焼きそばやオリエンテーションができた。
- 5日目：何度かやった野外炊事が協力してうまくできるようになった。
- 6日目：野外炊事でうまくアレンジ料理ができなかったので次はがんばりたい。
- 7日目：これからはみんなと協力していろいろなことを成功させていきたい。

1か月後 (保護者アンケート)

- ・普段はあまり自分の話をしないが、キャンプの話は積極的にしていた。
- ・キャンプ後は、学校での出来事など話すようになった。
- ・母親の問いかけにも積極的に答えるようになった。
- ・12月にも「お久しぶりキャンプをやりたい」と話していた。

考察

- ・項目①、②は日が経過することによって数値の向上が見られたことからグループ内の話し合いで進んで発言したり、友達の意見を聞いたりすることができるようになったことがうかがえる。
- ・項目④・⑤においては、比較的高い水準で推移していることからグループへの所属意識が高いことがうかがえる。
- ・自由記述ではキャンプが進むにつれ「協力」という言葉を使うようになり、プログラムを通し他者と協力する場面を多く経験できた結果だと推察される。
- ・保護者アンケートの結果からも自分の思いや考えを言葉にできるようになったことがうかがえる。

(2)あかぎ無限大キャンプにおける社会的能力の変容

國學院大學 准教授 青木 康太郎

1.はじめに

本研究では、あかぎ無限大キャンプで目指す子供像を踏まえ、参加者の社会的能力の変容に着目し、教育効果を検証することとした。

社会的能力の測定は、田中芳幸ら(2011)が開発した「小学生版「社会性と情動」尺度」のうち、基礎的な社会的能力である「自己コントロール」「対人関係」「責任のある意思決定」「自己への気づき」「他者への気づき」を用いて、キャンプの事前、事後、1か月後に調査を実施した。なお、事後調査については、プログラムの都合上、調査票を持ち帰って自宅で回答してもらい、1か月後の事後キャンプで回収することとした。

分析に当たっては、基礎的な社会的能力の各因子の平均(M)と標準偏差(SD)を算出した後、測定時期を要因とした一要因分散分析を行った。また、測定時期間の効果量(cohen's d)を算出し、教育効果の大きさも併せて確認した。

2.分析結果

基礎的な社会的能力(自己コントロール、対人関係、責任のある意思決定、自己への気づき、他者への気づき)の平均値(M)の推移は図1のとおりである。分析の結果、すべての因子に測定時期の主効果に有意差は認められなかった。そこで、各測定時期間の効果量(効果量の目安 .20=小 .50=中 .80=大)をみたところ、「自己コントロール」はキャンプの事前-事後の間に小程度の効果量が認められ、「自己コントロール」の向上効果が示唆されたものの、事後-1か月後の間にも小程度の効果量が認められことから、「自己コントロール」の向上は1か月後まで持続していないということが分かった。

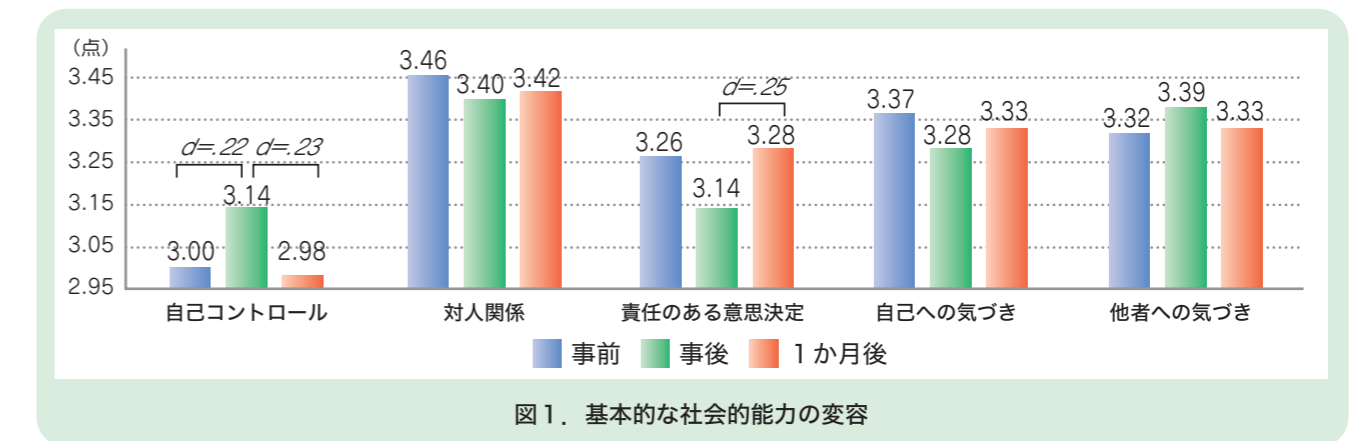


図1. 基本的な社会的能力の変容

3.まとめ

本研究では、基礎的な社会的能力に有意な向上は認められなかったものの、キャンプの事前-事後の効果量をみると「自己コントロール」に小さな効果が認められたことから、あかぎ無限大キャンプでは、基礎的な社会的能力のうち、「自己コントロール」が向上する可能性が示唆された。

今後は、あかぎ無限大キャンプの体験にも着目し、それらの体験が参加者の社会的能力の変容にどういった影響を及ぼすのかについて検証し、あかぎ無限大キャンプの成果や課題を詳細に分析していく必要と考えている。

(3) 慶應義塾大学医学部・国立赤城青少年交流の家・株式会社坪田ラボ・近視予防フォーラムとの共同研究

慶應義塾大学医学部眼科学教室 特任助教 小川 護

【研究課題】

屋外活動の眼への影響の調査

【研究の目的】

約1週間の屋外活動前後で屈折値・眼のバイオメトリーデータ・ドライアイ・アレルギー性結膜炎などを評価・比較することが本研究の目的である。

【研究の概要】

国立赤城青少年交流の家にて子どもを対象に屋外活動を中心としたプログラムが毎年実施されている。国立青少年教育振興機構から屋外活動と眼に関する調査依頼が慶應義塾大学医学部眼科学教室・株式会社坪田ラボにあり、13者で共同研究を実施する運びとなった。測定では屈折値や、眼軸長など眼のバイオメトリーデータを測定し、近視などに関連すると考えられている環境因子についても質問票で評価する。初年度は、令和3年度の国立赤城青少年交流の家の事業計画としての限界突破キャンプ参加者である17名を対象に、キャンプ前後で上記内容の探索的研究を行い比較した。2022年度はあかぎ無限大キャンプとして24名の参加人数であり、近視予防フォーラムが共同研究に加わった。プログラムの効果を評価する目的、プログラム約1カ月前に行われる事前キャンプ及び約1カ月後に行われる事後キャンプでも参加者に同様の測定を行う。

【検査日時】 国立赤城青少年交流の家4回 ※3回目は中止。

国立赤城青少年交流の家

- | | |
|---------------------------|-----------------------------------|
| 1. 7月9日(土) 13:30 - 15:00 | 事前キャンプ: 7月9日(土) ~ 10日(日) 1泊2日 |
| 2. 8月6日(土) 13:30 - 15:00 | 本キャンプ: 8月6日(土) ~ 13日(土) 7泊8日 |
| 3. 8月12日(金) 13:30 - 15:00 | ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため8月6日~11日に日程を短縮 |
| 4. 9月18日(日) 13:30 - 15:00 | 事後キャンプ: 9月17日(土) ~ 18日(日) 1泊2日 |

検査者: 慶應義塾大学病院眼科視能訓練士3名、眼科医1名

【検査内容】

近視の状態と近視関連因子(ドライアイ・アレルギー性結膜炎など)の変化

・その指標:

1) 主要評価項目

検査機器を用いた眼球パラメーター(屈折値、収差、瞳孔径、眼軸長、水晶体厚、脈絡膜厚など)の変化量(1週間のプログラム参加前後での比較)

2) 副次的評価項目

ドライアイ(シルマーテスト及びストリップメニスコメトリー)、アレルギー性結膜炎の変化(質問表)

3) 探索的評価項目

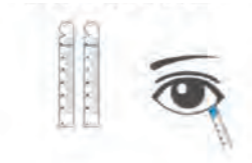
近業の際の眼から対象物までの距離、屋外活動時間、近業時間、睡眠時間、両親の近視、眼鏡装用者の眼鏡の種類などのアンケート項目(質問表)

機器を使う検査



1. IOL master 1-2分
眼軸長=眼の長さ
2. iTrace 1-2分
屈折値=近視や乱視の程度
3. OCT 2-3分
脈絡膜厚=眼の周りの厚み

試薬を使う検査



4. ストリップメニスコメトリー
涙の貯留量 15秒
5. シルマーテスト
涙の分泌量 5分

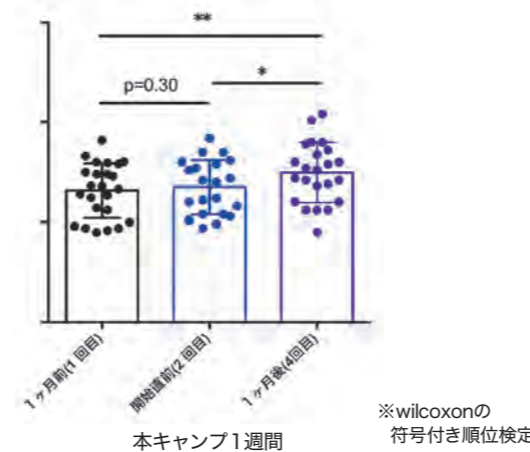
【参加者】

2022年度は24名(男子12名、女子12名)のうち小学5年生11人、6年生13人

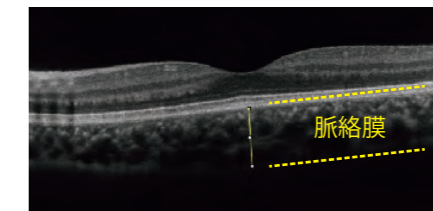
【結果】

1週間の集中的な屋外活動は児童の脈絡膜を厚くしたことが昨年の結果より示されたが、脈絡膜厚と近視には関連性が認められており、近視が強いと脈絡膜厚が薄く、近視が弱いと脈絡膜厚が厚いことが報告されている。キャンプに参加することで脈絡膜厚が有意に厚くなったことは、1週間という短期間で近視の進行を抑制する効果が表れていることが示唆されている。集中的な屋外活動の長期的な効果を検証することが重要であるため、2022年度はキャンプ前後約1カ月後に行われる事前・事後キャンプでの測定を行った。興味深いことに、1カ月後においても脈絡膜厚の増加は維持されており、キャンプの効果が持続されている可能性が考えられる。

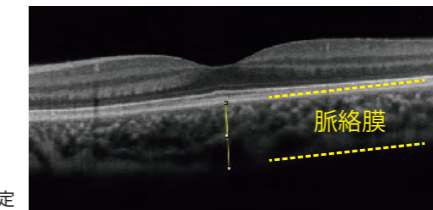
キャンプ前後での脈絡膜厚



プログラム前



プログラム後



検査風景



【展望】

参加者の中には脈絡膜厚がほとんど変化しなかった者も認められたため、近業時間などのライフスタイルも含めどういった因子が影響しているのかを探索していきたい。今後は参加者を増やし大規模及び全国的な調査も期待される。来年度以降はキャンプ直後と約1カ月後の比較を行ってきたい。

4 成果と課題

(1) 成果

○参加者満足度

【事前キャンプ】満足：21人（88%） やや満足：3人（12%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）
【本キャンプ】満足：22人（100%） やや満足：0人（0%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）
【事後キャンプ】満足：23人（100%） やや満足：0人（0%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）

○参加者アンケート・保護者アンケートや参加者実態から見る成果

- ①参加者アンケートで、「自分たちで考えて決める活動が楽しかった。」「グループのレクリエーションが楽しかった。」等の感想が見られたことから、グループで考え話し合う活動が、参加者の挑戦意欲の向上やグループへの所属感につながったと考える。
- ②参加者の様子やアンケート記述で「登頂できてよかった。」「仲間と協力して登りきることができた。」とあることから、本キャンプで実施できなかった登山で達成感やグループでの連帯感を感じることができたと考えられる。
- ③本キャンプの1カ月後の保護者アンケートで、「家の手伝いを自分からするようになった。」「（自分から）料理してみよう。」という感想から、本キャンプのプログラムが参加者の自発的な行動につながるきっかけの一助になったと考える。
- ④閉会式で決意表明を取り入れたが、どの参加者もすぐに自身の感じたことを自身の言葉で発表することができた。そのことから、参加者は本キャンプで学んだことを自分なりにふりかえり、これからの生活に生かしていこうとする意欲につながっていると考えられる。

○本キャンプの趣旨に対する成果

(1) 7泊8日の長期自然体験活動において、協働的な体験プログラム（野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等）を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。

- ①ステージを『基礎的知識や技能の獲得→活用』と設定したことで、グループ内で手助けが必要な場面に友達を支援、協力して活動する姿が見られた。
- ②「サード」ステージで実施したグループキャンプタイムでは、活動内容や野外炊事のメニューを決める際に、意欲的に話し合いに参加し、グループの友達と合意形成を図りながらお互いが納得のいく形へと導く姿が見られた。
- ③事前にボランティア研修キャンプを実施し、青木委員による「ふりかえりの仕方」についての講義・演習を行ったことにより、ボランティアが中心となって関わった毎日の「ふりかえり」が充実したものとなった。
- ④今年度は、本キャンプの1カ月後に事後キャンプを実施した。本キャンプが日程短縮のため、登山が未実施となったが事後キャンプに実施することができ、弾力的なプログラム調整が可能となった。また、参加者の1カ月の変容を直接見取ることができた。

(2) 課題

○プログラムについて

- ①レクリエーションの内容検討や野外炊事で作る料理の手順や役割分担をチームミーティングで話し合うことで、グループの話し合いが参加者にとってより「必要感」があるものにする。
- ②参加者がキャンプを通し、自身の成長や変容がわかるようなプログラムや掲示の開発をすることも必要だと考えられる。ベースとなる研修室にふりかえりカードは掲示したが、参加者が一目で成長を把握できるような掲示の方法とふりかえりカードの工夫が必要だと考える。
- ③「多様性を認め合える意識の醸成」という本キャンプの趣旨から、多様性を認め合うといったことにつながるプログラムとその効果を事前に検討し、精選しながら取り入れていくことが必要となる。

○参加者の安全確保・健康維持について

- ①熱中症対策
 - ・日中の活動時における、熱中症対策に重点を置いた休憩の取り方についてボランティアと十分に確認しながら対応していく必要がある。そのためにも、空調のきいた部屋を確保し、休憩時にはその部屋で休むことが可能な体制をつくる。
 - ・夜間における屋外のテント泊中の熱中症対策として、テント設営する時間や就寝時間の配慮と熱中症対策のグッズなどの用意をする。
 - ・感染症予防も考えながら、屋外での活動時は人と十分な距離が取れる活動時はマスクを外すよう推奨していく。
- ②感染症対策
 - ・要項、案内などでキャンプ参加までに感染症予防において注意する点を明記し、キャンプ前の体調管理を家庭に協力してもらうことも必要。
 - ・キャンプ参加前から十分な健康観察を行う。また、場合によっては参加前の抗原検査などを行うことで、スクリーニングとなり、感染者がいない状態でキャンプを始めることが感染症予防として考えられる。
 - ・感染症対策として、野外炊事や入浴など参加者に感染症予防ルールの徹底を事前に職員・ボランティアで共有する。
 - ・感染症が発生した場合、参加者の移動や活動の制限を十分に検討しておく必要がある。
- ③人員配置
 - ・感染症発生時、職員が対応にあたることから救護専門のスタッフの配置も考えられる。
 - ・グループごとの登山時には、グループごとに緊急時に適切な対応が取れるような職員の配置が必要となる。
 - ・今回は各班にボランティアを2名ずつ配置したが、1名にする、もしくはリーダー、サブリーダーというように役割を明確にし、参加者に対応することが必要である。

(3) 推進委員より(五十音順)

あかぎ無限大キャンプに秘められた可能性

國學院大學人間開発学部 准教授 青木 康太郎 氏

限界突破キャンプに続き、キャンプの教育効果の研究を担当させていただきました。今年は、3日間、キャンプに参加させていただき、子供たちと一緒に野外炊事やテント設営、レクリエーションなどを楽しみました。今回は、途中でキャンプが中止となり、残念ながらメインプログラムの登山に行くことができませんでしたが、それまでのキャンプ生活をみていると、日頃の生活では味わえないゆったりした時間の中で、自分たちのやりたい活動を存分に楽しんでいる子供たちの姿がたくさんみられました。その結果、研究では、あかぎ無限大キャンプを通じて子供の社会的能力が向上する可能性が示唆されました。教育効果については引き続き検証が必要ですが、キャンプ生活を送る子供たちの姿をみていると、あかぎ無限大キャンプには今回の研究では示されなかった秘められた可能性があると感じています。

新たな長期キャンプ

群馬県西部教育事務所生涯学習係 社会教育主事 青山 裕也 氏

今年度は協働的な体験プログラムを通して、多様性を認め合える意識の醸成を図ることを趣旨とした「あかぎ無限大キャンプ」が実施されました。決められたプログラムに沿って活動するキャンプと違い、複数のメニューから参加者同士で互いの意見を尊重しながらグループで意思決定したり、さらには自分自身で自己決定したりするキャンプとなりとても新鮮でした。

私が参加した本キャンプ3日目は、プログラムのスケジュールにもゆとりがあり、出会って間もない同世代の仲間と自然を満喫しながらの協働活動は、自分自身や他者を知ることができ、心のトレーニングにもなったと思います。忙しく過ぎていく日常と離れ、自然豊かな場所でゆったりと活動できる体験プログラムは、参加者にとって「豊かな心」も育むことができる新たな長期キャンプの姿になるのではないかと感じました。

キャンプの先に見える無限大の景色

慶應大学医学部 眼科学教室 特任助教 小川 護 氏

昨年の限界突破キャンプに引き続き、本年度もキャンプ中に眼の測定を行わせていただきました。新型コロナウイルスという見えないものに対して子供たちは自分たちでできることを考え取り組んでいました。難しいと感じる検査もあったはずですが、最終日の検査では小学生とは思えない集中力でした。あかぎ無限大キャンプを通じて心と身体が成長していったのだと思います。ご協力を誠に感謝申し上げます。

事前キャンプや事後キャンプもあり、様々な経験ができたことと存じます。個人的には、長七郎山に登頂しまして、豊かな自然を感じながら環境測定を行いました。昔から子供はお家の中にばかりいないで外でよく遊びなさいと言われていますが、なぜ良いのかはいまだにはっきりとは分かっていません。研究を深め、屋外活動の眼や体への良い影響を科学的に明らかにし、子供たちの健康増進のサポートができれば幸いです。

(4) スタッフより

自分も相手も大事に

企画指導専門職 小林 大輔

「あかぎ無限大キャンプ」の24名の仲間とともに課題に向かって励まし合いながら過ごした日々は、みなさんの世界を大きく広げました。これからの学校生活でも様々な人と出会うと思います。その時は、「あかぎ無限大キャンプ」を思い出し、自分の意見をしっかりと示し、相手の意見も尊重して、よりよい人間関係を築いてもらいたいです。遠くからですが、いつまでも応援しています。また会いましょう。

出会いと成長

企画指導専門職 中山 太平

この「あかぎ無限大キャンプ」を通し、みなさんはたくさんの経験をし、成長しました。一人ではできないこともグループの仲間と助け合い、支えあいながら乗り越える姿が毎日のように見られました。このキャンプでの出会いを大切に、そしてこれからの出会いも大切にしてください。そしてこのキャンプで学んだ、「自分も相手も大事にすること」を忘れずにいてください。

常に真剣に前向きに

事業推進係 小林 久瑠美

仲間と協力しながら活動しているみなさんの顔は、とても真剣でやる気に満ち溢れていました。何よりも、班で工夫して何事も全力で楽しもうとする姿から、みなさんの無限大の可能性を感じました。これからは、キャンプで学んだことを生かして、それぞれの場所で活躍してくれることを期待しています。

そして、国立赤城青少年交流の家にまたいつでも帰ってきてください！お待ちしております。

子供たちの笑顔のために

学生サポーター 細田 希星

昨年度の限界突破キャンプでは、班付きボランティアとして、子供たちと活動をとおして多く関わりました。今年度は運営スタッフとして、ボランティアと連携を図りながら運営の協力をしました。昨年度と違った立場を経験できたことで、子供たちが笑顔で活動するためには、事前の準備の大切さなど新たな学びを深めることができました。

自分で考えること

文教大学 片倉 隆之介

様々なことを考えて、悩んで、行動して、また考えてを繰り返したキャンプでした。しかし、それは子供たちも同じだったと思います。自分は何をしたいのか、この状況では何をすべきなのかをたくさん考えてもらいました。お互いにとって忘れることの出来ない経験ばかりでした。関わってくださった全ての方に感謝しかありません。

心の壁を下げる

國學院大學 齋藤 隻斗

私の目標は、子供たちの心を開かせ、常に笑顔を絶やさない環境を作ることでした。心を開かせるには、子供たちの心の壁を下げさせるような関わり方が必要でした。それをボランティアの仲間と模索し、意見を出し合うことで私たち自身の心の壁を下げることができ、緊張することなく子供たちと関わることに繋がりました。

子供たちの笑顔のために仲間と切磋琢磨した経験は、私の財産となりました。

信頼を築く重要性

國學院大學 坂元 力

私は、全体ボランティアとして全ての子供と話し、信頼関係を築くよう努め、指導者として子供が居心地のいい相手となるよう、青木先生の講義を基に行動しました。見ることや、考えることが多くあった全体ボランティアという役割は、子供との信頼関係を第一に考えて行動することで、他のリーダーとは違う新たな役割として行動できたのではないかと感じました。



(4)スタッフより

子供の本心を見つける

國學院大学 佐々木 大知

私はこの「あかぎ無限大キャンプ」で、子供たちの本心を大切に行動するために、ふりかえりシートを重点的に確認しました。ふりかえりシートには子供が今日1日どう感じたのかが詳しく書いてあるため、どう行動するべきかを明確にすることができました。話し合いで子供の感想を掘り下げられるような問いかけが、子供の本心を見つける始まりなのだと感じました。

人と関わる一瞬を大切に

神奈川県大学 大後 双葉

私が無限大キャンプで感じたことは、「人と関わる機会は偶然で一瞬」であるということでした。

小さな関わりでも人によっては大きな影響を与えていること、人それぞれに適した関わり方があるということを改めて感じることでできたキャンプでした。

たくさんの人に出会い・関わることでできたこの機会にとっても感謝しています。

目標に向かって

東京家政大学 稲村 紗彩

無限大キャンプを通じて、皆で同じ目標に向かって協力し支え合うことの大切さを学びました。もちろん一人ひとり性格や能力は違いますし、個人の目標も違うと思います。しかし「無限大キャンプを最後までやり遂げる」という目標は皆同じです。

今後は、今回のキャンプで学んだことを生かし、常に自分の目標を明確にして初心を忘れることなく様々なことに挑戦していきたいです。

良いファシリテーターであるために

東京家政大学 平松 華歩

これまでは組織の中でも意見の受け手であることが多く、自ら積極的に他の人の意見を引き出そうとしてこなかったが、青木先生の講義を受けて、組織として限られた時間の中でよりよい結論を出すために必要な立場であるファシリテーターの重要性を知りました。講義内において実際に練習をしてみて、立場が変わると自らの視点の角度も変わってくることを実感し、日常的に意識しようと考えることができました。

向き合うということ

文教大学 三井田 奈々

私は今回の「あかぎ無限大キャンプ」をとおして真剣に子供たちとも自分とも向き合うことができました。子供たちとのふりかえりの場面では、意見を出している子供以外の様子も観察し、次の日の活動に生かすことができたと思います。私にとって忘れられないとても素敵なキャンプになったと感じています。本当にありがとうございました。

成長は無量大

東京家政大学 大森 正恵

青木先生から教わった学びの中に、ボランティア側が促した成長は成長では無いということを知りました。子供たちが積極的にお手伝いをする事や、協調性を大事にすることは、私たちが促して行ってもそれは指示に従っただけであって、成長ではないということを実感しました。子供たちが主体的に行動することを意識し、見守る中で、声かけが活発になるなどの自主性を見ることができました。

あかぎ無限大キャンプを終えて

東京家政大学 吉川 優花

子供たちとどう関わっていくのか、ボランティアとして、何が自分にできるのかを絶えず考え続ける日々でした。日を追うごとにグループ内で仲間との結びつきが強くなる一方で、グループ内で意見の衝突が生じることもありました。青木先生の講義で教わったボランティアの役割を意識しながらグループ内のリーダーとして時に指導を行ったり、話を聞いたりすることで子供たち同士のコミュニケーションを促進させることができました。



おわりに

新型コロナウイルス感染症が終息しない中、長期自然体験活動事業の実施を決定することは、勇気が必要です。そして担当者自身が納得する十分な準備を行うことが必要だと考えます。当たり前のことですが、事業担当者は、何度も実地踏査を行い、参加者の事前キャンプでの体力を考慮して、本キャンプの前にも実地踏査を重ねました。この準備があったからこそ、突発的な問題にも対処できたと考えます。「事業の準備は、いつも120%」と思っています。

おかげさまで、コロナ禍ではありましたが、24名の募集に対して42名の応募がありました。「限界突破キャンプ」からの事業継続が浸透してきていると感じました。今年度は、登山活動中心から屋外のグループ活動中心に変更したこともあり、体力に自信のない小学生の応募も増加しました。この事業をきっかけに体力に自信がなくても「自然体験活動」の楽しさに気づいてほしいと願っています。

また、今年度1か月後においても脈絡膜厚の増加が維持されており、キャンプの効果が持続されている可能性が示唆されたことは、共同研究において、大きな一歩だと捉えています。

豊かな人間性を育む長期自然体験事業を推進するためには、職員だけで企画するのではなく、「推進委員会」を設置し、企画の段階から委員の先生方にご意見をいただき、実施することが重要です。今年度も委員の方々に、「ボランティア研修キャンプの講師」、「本キャンプの視察」等、多大なご協力をいただきました。

この場をお借りして、本事業にご協力いただきました委員の皆様には厚くお礼申し上げます。

令和5年1月 国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子

後援：群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、埼玉県教育委員会、栃木県教育委員会、茨城県教育委員会
協力：群馬テレビ、上毛新聞
共同研究：慶應義塾大学医学部眼科学教室、株式会社坪田ラボ、近視予防フォーラム

令和4年度 国立赤城青少年交流の家職員

所長	松村 純子
次長	齊藤 裕徳
主任企画指導専門職	渡邊 秀幸
企画指導専門職	竹内 正則/小林 大輔/杉山 直弥/中山 太平
主幹兼事業推進係長	福岡 公平
事業推進係員	小林久瑠美/小野 北斗 阿佐美幸子/寺田 里美/吉田 賢/高田 真美/小沼 朋暉
総務係長	逸見 博俊
総務係員	鈴木 和子/松井莉乃羽
管理係長	長谷川敦子
管理係主任	白石 崇尋
管理係員	佐藤 順彦/新藤 祐司
学生サポーター	細田 希星